

# 令和4年度「未来を創る学力向上支援事業」に係る未来を創る授業力向上協議会(外国語)

【目的】 各中学校及び義務教育学校後期課程の外国語科担当の教員等を対象に、言語活動の充実に向けた授業改善や、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりに関する説明・講義等を行うことにより、外国語科教員の授業力向上に資する。

【期日】 令和4年7月1日(金) 13:20～16:30

【主催】 大分県教育委員会

【会場】 コンパルホール 多目的ホール

## 1 開会行事 挨拶

大分県教育庁義務教育課長 武野 太

CEFR A1 レベル相当(英検3級程度)以上の英語力を有すると思われる生徒は、全国平均が47%であるのに対し、本県は38.7%という結果であり、本県の生徒の英語力には課題がある。CAN-DOリスト形式による学習到達目標の達成状況は令和元年度の54.2%に対し、令和3年度は72.9%になっており授業改善ができています。

4月に実施された大分県学力定着状況調査の「英語が好きですか」調査結果は、昨年度よりも10%程度下がっている。この学年は、小学校6年生の時に外国語が教科化された学年であり、小中の接続や小学校間の習熟の差、また、コロナ禍における対話的な学びの不足等、今後分析し改善を図る必要がある。各学校でも調査結果の分析をしっかりと行い、授業改善につなげ、「英語が楽しい」という生徒を増やしてもらいたい。

## 2 行政説明「大分県における中学校外国語科の現状と課題」

＜説明者＞大分県教育庁義務教育課 指導主事 田代和馬

- ・生徒の英語力の状況は2極化している。いわゆるスローラーナーへの支援については、教えすぎたり示しすぎたりせず、バランスを大事にすることが大事。
- ・CAN-DOリスト形式による学習到達目標は、子どもと共有しながら進めること。
- ・教師の英語力を示す指標であるCEFR B2レベル(英検準一級程度)以上を取得する大分県の教師の割合は41.5%で、全国平均の40.8%を上回っているのだが、授業における教師の英語使用状況の割合は8.2%で、全国平均の15.4%より低い(データはR3年度)。そのため、授業の中での積極的な英語の使用の割合を高めて、授業を実際のコミュニケーションの場としてほしい。
- ・R3年度の県調査の結果をふまえて、今後、インプット(受信)について授業改善を進めていく必要がある。指導時には、「教えすぎ・示しすぎ」とならないことを念頭に置いた上で、例えば、メモを自力で取らせて情報の把握・整理ができるよう支援や工夫をお願いしたい。また、聞いたことに対して適切に応じる活動を取り入れるなど、技能統合型の組み立てを行う必要もある。



### 3 講義「指導と評価の一体化に向けた外国語科における授業改善」

＜講師＞文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官 入之内昌徳 氏

- 「英語に対して自信がない」、「聞くことに対して改善が必要」という二つの課題に対し、子どもたちに学習者として自信をつけさせていくことが私たちのミッションである。



- 教師の理想的な姿は「子どもたちの学びを支える伴走者」としての役割である。特にナビゲーターとして、子どもたちをゴールに導くことが求められる。
- 外国語教育における生徒の英語力との相関の中で、取り組みたい課題は以下の2点

#### ① CAN-DOリスト形式の学習到達目標の公表と把握

- ・大分県では、目標設定はしているが、公表している学校が少ない。公表は生徒と目標を共有することが含まれるので、ぜひ、共有してほしい。その際、目標と指導と評価が一体化することに留意すること。

#### ② 小学校との連携に取り組んでいる中学校の割合

- ・大分県は6割程度小中連携している。小中の学びをつなぐため5つの視点で、中学校の教師が小学校の学習指導要領や教科書を見る必要がある。

視点1：小学校で学習する語句や表現を知る。

視点2：小学校での具体的な言語活動やパフォーマンステストを聞き取る。

視点3：用いている教材を知る。

視点4：コミュニケーションを図る態度、学び方を共有し引き継ぐ。

視点5：育てたい児童生徒像を共通理解する。

- 英語指導者としてのスキルアップ

- ・自分の授業と比較してみたい動画紹介

「中学校の外国語教育はこう変わる！③」

(文部科学省mextchannel) <https://www.youtube.com/watch?v=eR4fxbWQsts>



→ 子どもの表現が黒板に書かれ可視化されている理由は、次の言語活動で自分たちが使える表現として取り上げている。

→ 外国語の授業は、英語を学ぶ場であり、使う場であるということ。生徒にとって、教師は英語を話すロールモデル。英語を使う機会が多ければ多いほど先生たちも自信がつく。

→ 読む目的を持たせて読ませて、言語活動の1回目、そして中間指導をしたあと、言語活動の2回目を行っていることに着目。

→ 振り返りを大切に。内省する時間を充分確保する。教師のタイムマネジメントが必要。

- アウトプット（発信）をさせるためには、良質なインプット（受信）が大切。良質なインプットはALTとのチームティーチングや英語教員が使う英語、子どもたち同士のやり取りが考えられる。理解可能なインプットを繰り返すことで、徐々にアウトプットへ転化する。

### 4 協議「一人一台端末を活用した英語科の授業実践」

- ・端末活用の実践事例交流

